



Title	日本の現代青年における自己の仮面性に関する検討 : 「キャラ」を介した友人関係による不適合過程に着目して [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	村井, 史香
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第15165号
Issue Date	2022-09-26
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/87123">https://hdl.handle.net/2115/87123</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	doctoral thesis
File Information	MURAI_Fumika_review.pdf, 審査の要旨



## 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学） 氏名：村井史香

主査 准教授 加藤 弘 通  
審査委員 副査 教授 関 あゆみ  
副査 准教授 川田 学  
副査 助教 千島 雄太（筑波大学人間系）

### 学位論文題名

日本の現代青年における自己の仮面性に関する検討  
—「キャラ」を介した友人関係による不適応過程に注目して—

本論文は、現代青年の友人関係の中で使用される「キャラ」という仕組みを検討することで、多元的自己における「仮面の複数化」、及び不適応との関係を検討したものである。

従来、青年期の自己については、アイデンティティ研究に代表されるように、統合的で一貫性のある自己が望ましく、適応的であると考えられてきた。しかし、2000年前後から、その見方に疑問が付され、むしろ現代社会では、状況に応じて複数の自己を使い分ける多元的自己のほうが一般的であり、適応的だとする議論がなされてきた。さらに、その後の研究では多元的自己にも、「本当の自分」そのものを複数化する「素顔の複数化」と、「偽の自分」（仮面）を「本当の自分」（素顔）から切り離した上で前者を複数化する「仮面の複数化」があり、不適応には「仮面の複数化」が関連すると指摘されてきた。しかし、「仮面の複数化」については、測定上の問題から実態が十分に明らかにされておらず、また、なぜそれが不適応と関連するのか、そのメカニズムも未検討のままであった。そこで本論文では、青年自身が使用している「キャラ」という現象を「仮面の複数化」の指標として取り上げ、「仮面の複数化」と不適応との関係を検討した。

研究1では多元的自己、「キャラ」に関する先行研究をレビューし、解決すべき課題を抽出した。研究2～3では、小学4年生～大学生を対象に質問紙調査を行い、「キャラ」の認識や保有に関する実態と発達的变化を検討した。研究4では、「キャラ」を介した友人関係の背景要因を検討し、「キャラ」は他者から付与され、行動を制限するだけでなく、新しい友人関係を築く際に利用され、仲間内での居場所を確保するなど、集団適応に向けて積極的に

利用される側面も有していることを明らかにした。

続く研究5では、友人関係において「キャラ」の不適應的な側面に焦点をあて、「キャラ」を演じるストレスを高める要因を検討した。その結果、「キャラ」が「本当の自分」と乖離し、自己の本来感が低下するときに「キャラ」を演じるストレスが高まり、不適應な状態に陥ることが明らかになった。最後の研究6では、大学生へのインタビュー調査を通して、「キャラ」を有する青年自身の体験過程に焦点を当て、「キャラ」は、当人が集団への適応を模索するなかで生じるという能動的な側面も有する一方で、「キャラ」の維持過程においては、周囲の期待に応え続けることに苦痛を感じたり、「キャラ」と「本当の自分」との差異が、違和感を覚えさせたりするなど、不適應的な側面もあることを明らかにした。また「キャラ」による不適應の背景には、「本当の自分」の模索が隠れており、いわば多元的な自己をもつことで、一元的な自己の追求が可能になっていることが示唆された。

審査委員会が評価した本論文の意義は以下の4点である。第1に、小学校高学年から大学生まで幅広い年代を対象とした豊富な量的・質的データにもとづき「キャラ」の実態を明らかにし、「キャラ」について発達的な観点から議論する素地を拓いたこと。第2に、「キャラ」がもつ適應的な意義を明らかにしつつ、そのプロセスを詳細に検討し、「キャラ」＝「仮面の複数化」がなぜ不適應と結びつくのか、そのメカニズムを明らかにしたこと。第3に、自己の多元化と不適應の関係を詳しく検討することで、一見、不適應に見える行動の背景に、「本当の自分」の模索といったポジティブな発達に関係している可能性を示唆したこと。第4に、以上の検討を通して、現代青年の自己の在り方についてなされてきた、一元的か多元的かという二分法的議論を「多元的であることで、一元的な自己の追求が可能になる」という形で、統合的な理解を示したことである。

今後の課題としては、発達的な視点からデータを収集した点が評価されるものの、その発達的な変化を意味づける理論的視座の構築には至っていないという、より理論的な検討の必要性が挙げられた。しかしながら、「キャラ」という日常に即した現象から青年の自己発達に接近したことにより、一見、不適應にさえみえる「仮面の複数化」の背後に、「本当の自分」への模索が孕まれているという新たな青年期の自己発達の理解を提示した点は、他の研究にはみられない本論文の独自性であり、高く評価できる。以上のことから判断し、審査委員会は著者が北海道大学博士(教育学)の学位を授与されるに値すると認めるに至った。